

人生のピンチは苦き良薬

koberyo1

わたしは、「肺門リンパ節結核」を病んだことがある。辞書を引くと、つぎの説明がある。いわく、一一肺結核の初期にみられる病変のうち、肺門のリンパ節に初感染の病巣をつくるもの、だそうだ。簡単にいえば、「結核」のことである。

この病気は当時、じつにありふれた病気だった。大正から昭和にかけ、大流行し、多くの死者をだした。このとき、結核に効果する医薬品はなかった。いまでは信じられない話だが、この時代、ペニシリンすらなかったのである。

ペニシリン一錠あれば、救えるはずの命はいくらでもあった。医療が発達した現代、過去から照らせば、まさに今のこの泰平の世は「エデンの園」、楽園に思えてくる。現在はほんとうに有難い時代なのだ。この「有り難さ」は、病気や戦争で犠牲になった何百、何千万の人々の人生の上に成立している。その厳粛な事実を胸に刻まなくては罰があたると、わたしなどは思うのだ。

ところで、その頃の「結核」の治療法としては、寝床で安静にして病気が肺のなかで動かぬようにすることだったり、また生き延びるには体力が必要で、そのためには食物から質、量ともに十分な栄養を摂取するくらいしかなかった。

あと治療といえば、医者は「気胸療法（ききょうりょうほう）」をすすめてくれた。別名「人工気胸法」とも呼ばれ、胸膜腔（きょうまくくう）に空気を送り込み、それによって病巣を固定し、治癒をすすめるものだ。

ベッドに横たわり、外部から肋骨のあいだに太い管を差し込む。そうして針先から胸膜腔に空気を送り込むのだ。局部麻酔の注射をしたが、肋骨のあいだに太い針をブス、っと刺すので最初は怖かった。胸は締め付けられるわ、痛くなるわ、で大変な思いをした。それに息苦しい。こんな痛い目に遭って治療するのは何ともイヤだと思った。ともあれ、当時はそれらの方法しか「結核」に関しては対抗する手段がなかった。しかも、ごくふつうの人が罹るポピュラーな、何ら珍しいことのない病気であった。遠藤周作の「海と毒薬」の主人公が胸の病気を患い、胸に針を入れるシーンが出てくるが、それくらい皆が知っている病気でもあった。

気胸という治療は痛い。しかし予科練での厳しい訓練のことを思えば、なんということもない。それに一刻もはやく治したかったので、嫌な先生のところに行くのも苦ではなくなってきた。今でもレントゲンを撮れば、胸の辺りに石灰化した傷跡が残った写真を見ることができる。

わたしは当時、チュースナショナル銀行を辞職し、もっぱら療養中心の「安静、安静」の日々を送り、気が付けば6カ月が経過していた。

父の友人の茨木県人であるNさんが、「K会計事務所を探している」と言う。一度は半ば上の空で聞いていたし、「今、自分は結核だから」と理由をつけて断った。それでも再び2カ月ほど経過したあとでNさんがやってきて、

「先方は病気のことは承知している。なので、アルバイト的にKさんのところで「会計」を勉強しながら手に職をつけてみてはどうか」

と行ってくださった。

なるほど、これは有難い話である。となれば、医者に相談するしかあるまい。その頃、病気がどの程度のものなのか、客観的なモノサシが欲しかったのである。

すると、医者は次のように言った。

「長く床についていては逆に体力が落ちるから動いた方がよかろう」

とのことだった。

わたしは医者からこのような返事と指導を頂戴し、「K会計事務所」に履歴者を提出することにした。Nさんに履歴書を託したのである。

わたしは結核のせいで銀行の仕事を失ったが、「捨てる神あれば拾う神あり」で藁をもつかむ思いで中央大学の井上達雄先生の簿記の本を見たりしていた。井上達雄（いのうえたつお、1907年11月22日－1995年4月24日）とは、日本の有名な会計学者・商学者である。わたしは今でもその本を書庫に大切に保管している。

さて、履歴書を託してから1週間ほどでNさんはやってきた。Nさんと会計事務所を経営されているKさんとは同郷で、どうやら親しい間柄らしい。さっそく、面接しましょう、というスピード感ある展開となり、麴町4丁目にあるKさんのお屋敷を訪問し、面接をした。その結果、明日より入社してほしい、ということだった。

わたしは希望をいっぱい胸にふくらませ、意気揚々と事務所にかよった。

ところでK会計事務所だが、麴町4丁目は都電の停留所のある一等地に位置していた。隣は歌舞伎役者の先代、中村勘三郎さんの家で三味線の音や太鼓の音も聴こえてきた。

事務所は、Kさんのお屋敷の一隅、スペース的には六畳くらいのところにあった。

会計事務所の所長、Kさんだが、丸顔で恰幅がよく、後年になってから田中角栄に似ていると思った。……いや、顔が似ているというのではない。庭に大きな池があり、鯉が10匹ほど泳いでいるのが見えた。Kさんはダブルの背広姿で下駄を履き、鯉に餌を与えてから出かけるのが常だったので、わたしはそう感じたのだろう。

Kさんは間接税部門のベテランで、とりわけ作り酒屋、……今でいう酒造メーカーというのだろうか、酒税の道を歩んできた専門家であると聞いた。奥さんは相撲取りのようなでっぷり太った容姿の方だった。二人の娘がいたが、それぞれ結婚し、一人は蔵前の玩具メーカーに嫁いだ。もう一人の方の子はどうなったかわからない。末っ子は男の子で、わたしに時々、声をかけてくれた。またKさんの茨木の親戚から年頃の娘が二人、女中見習いということで来ていた。買い物やら日常の雑事など、奥さんの身の回りの世話をしようだった。

さて、わたしの会計事務所での仕事だが、1か月くらいは記帳と書類の整理であった。利用客が多く、すべてのお客さんの面倒まではみることができなかった。その頃、所得税の青色申告の記帳指導が中心で、某所の旅行組合の組合長や、その組合の事務員との接触がメインの仕事となっていた。当時、青色申告の記帳というものが、みんなが嫌がってなかなか浸透しないという事情があり、これを指導する役目であった。

せわしく国電、――いまのJRだが、に乗ったり、市電に乗り換えるなどして、各所にある旅館をたずねて歩きまわった。病氣療養中のわたしには過酷な仕事ではあったが、これでかなり体が鍛えられたのだと思う。

K会計事務所で働いた時期は、昭和29年2月から32年3月までだった。我ながらよく頑張ったと思う。

ここでわたしは簿記と税法との関係、バランスシートの見方、税金の申告などの基礎を養ったのである。

結核に苦しめられたわたしは、病気で仕事を失うも、それが新たな転機となって自分にふさわしい仕事に就くことができた。それがK会計事務所での仕事である。病気は人生にとってマイナスだが、ときに人生を好転させる苦き良薬であることを学んだ。